

宇都宮明神の「付祭り」にみる 宇都宮町人町の変容

渡 辺 康 代

- I. はじめに
- II. 近世における宇都宮町人町の構造
- III. 付祭り形態の変化
 - (1) 付祭りの開始
 - (2) 近世中期の付祭りの変化
- IV. 付祭りにみる町人町内部秩序の変容
 - (1) 付祭りの町順
 - (2) 神事的出し物を担う町
 - (3) 近世後期の祭礼評判と町順変容
- V. おわりに

I. はじめに

近年、近世における都市祭礼研究が、とくに日本史学の分野で進められてきている。そのなかには、近世の三都やそれに次ぐ規模を備える地方都市の祭礼から、幕府や藩が都市に及ぼした政治性を読み解こうとする研究の流れ¹⁾がある一方で、より小規模な町における祭礼や芸能の担い手、運営方法および形態から、近世の町やそれをとりまく地域社会の特性をみいだそうとする視点がある。

近世における祭礼執行のあり方は町ごとに個性があり、さまざまである。高牧實は、港町酒田を事例に、上・下の両山王社の神事祭礼が庄内藩成立以前の港町の特権商人らによって行われ続けたことを明らかにし、このような祭礼執行のあり方それ自体が、港町酒

田の近世における社会的特質を如実に表現しているとした²⁾。高牧の指摘のように、祭礼の際に特定の集団が際だつことは、その町の特質を示す一つの表れといえる。高牧は祭礼のなかでも神事祭礼に焦点をあて、酒田や久保田をはじめとする東北地方の諸都市における祭礼運営の実態やその地域差を明らかにした一連の研究成果をまとめている³⁾。

また、日本近世史とりわけ芸能史において、近世以降の「芸能の商品化」が指摘されているが、神田由築はその「商品」の流通構造を解明する必要があるとして、生産者たる芸能者集団、供給者たる興行師を明らかにしている⁴⁾。神田は、瀬戸内地域及び九州の国東半島から別府湾沿岸にかけての都市周辺地域における芸能興行の実態を解明し、面的な芸能流通の実態とシステムを明らかにした。

歴史地理学において、近世の祭礼を扱ったものには関戸・木部の研究があり⁵⁾、館林城下町を事例として、祭礼に現れる城下各町間の協力関係を明らかにし、城下町の形成過程を探る一助とした。

祭礼には、大きく二分すると、神職が関与する神事的儀式と、町人や村人が行う芸能などの技の側面とがあり、神事に附属して行われるという意味で後者を「付祭り」として捉えることができる。本稿においても、町人主体で行われる祭礼を以下、付祭りとして表現して

キーワード：付祭り、近世、宇都宮町人町、上町・下町

いきたい。

前稿では、戦国期以来の城下町である下野国那須郡烏山町を対象として、町人町の鎮守である天王社の付祭りが、近世前期から中期にかけて次第に町人の力を傾けた豪華で活気あるものへと変容していったことを明らかにした⁶⁾。この付祭りの変容は、烏山が旧来よりの特権商人を中心とした町から、当地の特産物をめぐって他国商人が移入し活況を呈する商人中心の町へと、性格的变化を遂げたことと関連している可能性を指摘した。このことから、付祭りの形態や運営のあり方は、町の特性と密接に結びついたものであり、その変容は町の変化の一側面を示しているといえよう。

一方、付祭りは各「町」間の競合で盛り上がる人が多いが、前稿では、付祭りに現れる各「町」毎の競合または協力関係を解明したり、各「町」毎の差異や個性をつきとめるには至らなかった。こうした各「町」間の力関係を示すために、付祭りにおける町順、付祭りに現れる各「町」間の競合や協力関係などを明らかにすることによって、その町の形成過程をも読み解きうる可能性がある。付祭りの形態や運営方法とその変容を明らかにすることは、町の特性およびその変化、各「町」の成り立ちなどの歴史地理学的課題を解明する手がかりとなり得ると考える。

本稿では、各「町」を単位とするミクロスケールでの捉え方を生かしながら、とくに、城および町の鎮守であった宇都宮明神の近世初期から幕末期にかけての付祭りの変化を明らかにし、それを通して、当時の宇都宮町人町内部における秩序の特質とその変容を解明することを目的とする。

Ⅱ．近世における宇都宮町人町の構造

下野国宇都宮は、慶長2年(1597)に宇都宮国綱が改易となるまで、宇都宮氏の中世以来の本拠地であった。中世の宇都宮では、鬼

怒川支流の田川沿いに北上する奥大道が宿郷を発達させ、「中河原」「上河原」「宿郷」「博労町」などに市場空間を有する町屋が存在していたことが想定されている⁷⁾。ここでは、近世初頭以降の宇都宮町人町を対象とし、町立てとその後の変容について述べることにしたい。

蒲生氏は宇都宮に慶長3年(1598)に入封し、旧領近江から日野商人を招き、城の外郭近くに住ませ日野町を開いた⁸⁾。宇都宮氏時代の最有力寺院の一つであった東勝寺が廃され、日野町は城に近接したこの寺院の跡地に開かれた⁹⁾。東勝寺以外にも、宇都宮氏時代には宇都宮明神の神宮寺や僧坊等が多数存在していた。中世における明神の神事祭礼の役割分担を描いた「造営日記」¹⁰⁾「慈心院造営之日記」¹¹⁾等の史料からは、慈心院・不動院・高尾神・池上坊・橋本坊・蓬莱坊等の存在が窺え、これらは明神の祭礼に関わる主要な寺社であったと考えられる。神宮寺の慈心院は宮嶋町付近に存在したが、宇都宮氏の改易後まもなく廃された。池上坊や蓬莱坊は、近世以降の池上町、蓬莱町の「町」名の起源となった。このように、近世以降「町」として展開する地区のなかには、その前身が寺坊であった場合も存在していた。さらに、近世の宇都宮町人町の多くには「会所坊」「坊式」と呼ばれる小院が存在していた¹²⁾。『宇都宮故実抄』¹³⁾に「城下坊式・会所の僧は、大明神供僧頭惣行事、慈心院徳生寺の所属なり」とあるように、これらは慈心院の支坊であった。近世以前の宇都宮には宇都宮明神の多数の坊が存在し、その城下町は、町人地はもとより数々の寺院や坊、社家屋敷等で構成されていたことを念頭に置く必要があるだろう。

蒲生氏の入封により、東勝寺跡に新たに日野町が形成されたことは、近世宇都宮城下町の建設の第一歩と捉えられる。城に最も近接した要地に日野町が町立てされたことには、城主がいかにこの新たな町を重視していたか

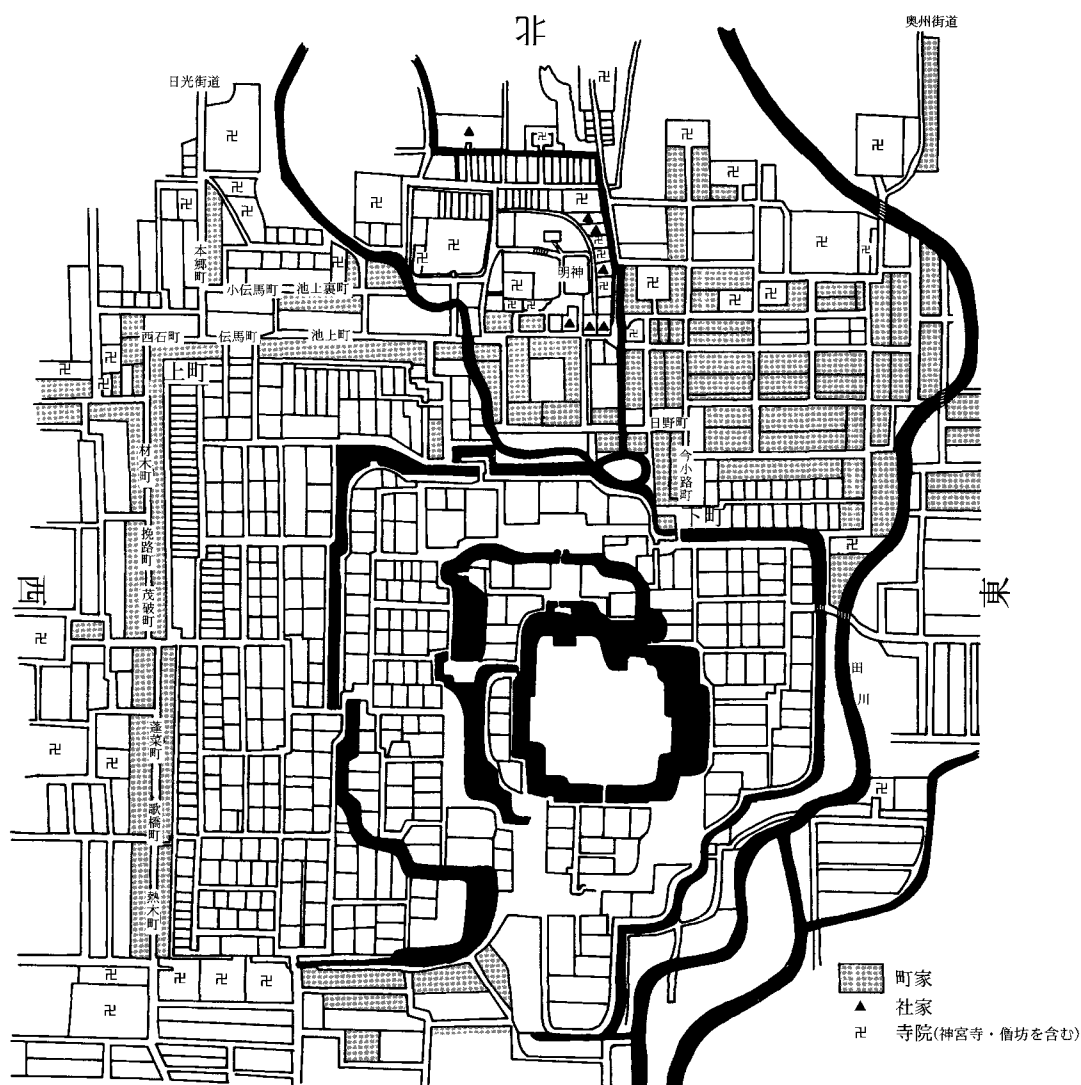


図1 近世初期における宇都宮城下町

(慶安～寛文期 (1648～73)「下野国宇津宮図」より作成)
※町名および凡例は「下野国宇津宮図」にあるとおりに示した。

が示されているといえよう。

関ヶ原の勝利後、家康は蒲生氏を会津に再封させ、孫にあたる奥平家昌を宇都宮城主に据え、宇都宮は10万石の譜代大名の城下町となった。慶長7年(1602)、家康は宇都宮町に地子免許の特権を与え、あわせて公儀の伝馬役を課した。これは、江戸から奥州へ向かう

街道の宿駅として宇都宮町を整備する端緒となった。旧来の街道(奥大道)は、城の東側、田川沿いを通過していた。奥平家昌は慶長19年(1614)に城の北東部に位置する大町に5・10日の六斎市を開かせた。また、上河原町を奥州街道の通過路としたため、寛永11年(1634)、上河原で開かれていた市を隣接する

新宿町へ移動し3・8日の市立てを命じた(図3参照)。この変更の際、上河原に集まっていた旧来の市商人の木綿買商240人が訴訟を起こし、小間物売・麻売・魚売・八百屋もこれに協力した結果、新宿町での市の差配は木綿買商の内11人が行うこととなった¹⁴⁾。

このことから、旧来より木綿座を中心に、規模の大きい市が上河原町付近において開催されていたことが想定される¹⁵⁾。隣接する石町(=穀町)には、戦国期より特権商人からなる穀座が置かれ、米穀取引の専売権を有していた¹⁶⁾。上河原町・石町・大町をはじめとする城の北東部には、従来から発達した町場が形成されていたと判断できる。現存する最古の宇都宮城下町絵図をみても、城の北東部には町家が集中していた様子が窺える(図1)。それに対して、城の西側においては、元和4年(1618)に市立ての出願がみられ、2・7の市が開かれるようになった。

本稿では、宇都宮城と宇都宮明神とを結ぶ城下町の中央部(宇都宮明神門前)を境に、東部に展開する町人町を「下町地域」、西部の町人町を「上町地域」と称することとする¹⁷⁾。

元和3年(1617)から將軍家の日光山参詣が頻繁に行われるようになり、元和5年、宇都宮に入封した本多正純は、江戸に続く街道を奥大道から、城の西側を通る日光街道に改めた¹⁸⁾(図1)。日光街道と奥州街道の分岐点に位置する伝馬町に問屋場が設置され¹⁹⁾、のちに伝馬町・池上町付近に旅籠屋が集中するようになり、宇都宮の宿駅機能は西部の上町地域に集積していった。また「西石町(のちの新石町)」という町名が示しているように、日光街道が開通したことで、上町地域にも穀商売に携わる町が現れた。このように、近世初期に宿駅・商業機能が上町地域へ拡張されつつあったことが指摘できる。

さらに、『宇都宮史』²⁰⁾には「上町へ町年寄慶安年中被仰付候、日光御用往還為御用急成節、下町ニテハ御用滞候ニ付て之義也、寛永

年間より明暦年中、御当代町年寄植木半左衛門、横田長左衛門、名村市郎左衛門、佐藤長兵衛、森田伝兵衛²¹⁾、石川五郎左衛門(後幕ノ内ト改)、寛永年中迄ハ上町ニ無之」とあり、宇都宮藩は、下町地域に集中していた植木半左衛門²²⁾をはじめとする町年寄を上町地域に移住させていた。近世初期まで、町年寄は上町には存在しなかったことから、行政面においても従来よりの下町地域の優位性が指摘できる。近世初期において、藩は由緒ある宇都宮町人を上町地域へ移させ、商業機能と同様に行政機能も上町地域へ拡大させる意図を持っていたと考えられる。

以上のことから、本多正純以降の城主による宇都宮城下町の整備は、旧来より下町地域に集中していた商業および行政機能を分散させ、町人町の均等な発展を意図していた可能性があり、結果として、上町地域の商業と行政機能の拡充が起こっていたといえる。

町年寄森田氏²³⁾の記録である「宇都宮系図」²⁴⁾を手がかりに近世中期の宇都宮各町の商職人構成をみてみたい。「宇都宮系図」には、宇都宮氏をはじめ歴代城主と森田家の由緒や、町年寄を務めた森田氏の備忘録として宇都宮各町の人数や町高、商職人構成の特徴などの概要が記されている(表1)。この史料が記された年代については不明であるが、城主交替に関する記録が戸田能登守忠^{ただみつ}益で止まっていることから、18世紀半ばまでの記録と判断できる²⁵⁾。表1をみると、下町地域の上河原町や新宿町などでは、旧来よりの商業の盛況ぶりが窺える。上河原町では、荒物や木綿類の商家が軒を連ね、また造酒屋(摂津国屋)もみられ、商人町としての性格を明確にしていた。新宿町では六斎市が継続されていた。下町地域における近世中期の商業的特徴は、青物や肴、穀物や古着等、日常品を扱う商売が目立つことである。従来より宇都宮城下町やその周辺地域の消費を支えていたのは下町の商業であったと考えられる。

表1 近世中期における各町の商業的特徴

	*町順	町名	商業（生業）の特徴
下町	1	馬場町	片町也、旅籠をする、煙草入屋有、当所名物菓子屋1軒、目医師有。
	2	宮嶋町	町並穀物を売、油酒造屋、茶売、古着を売、呉服を商ふ、売薬京都より取次所有、横小路有、建具屋あり、横町にて荒物売。
	3	大工町	穀物商、造酒屋等品々有、横町有、うんとん、そば切を拵える。
	4	日野町	塗器物、薬種屋、薬屋。
上町	5	裏町	糒を専商ふ、百姓5、6人、明神の社人古嶋主計、中里内匠頭居之。
	6	伝馬町	家数35軒、町並品々商売人、専旅泊を本とす、刀脇指細工や2軒、酒造や平岩呉兵衛、難波や新右衛門、松口屋次郎兵衛、伊勢や反魂丹兼売。
	7	熱木町	家数40軒、大方作をする。
	8	南新町	家数61軒、専作する。
	9	材木町	98軒、品々商人、名得たるハ、材木屋1人、板屋伊左衛門といふ、馬具や1人。
	10	曲師町	桶屋、櫓物師、指物や、献上素麺や、菓子屋、紺屋、絵師1人。
	11	歌橋町	家数14軒、作人なり。
	12	本郷町	40軒、品々商人有り。
	13	池上町	家数77軒、旅泊之宿をするもの多し、本陣宿篠崎伝兵衛、品々商人、乗物や1軒、刀振1人、薬湯屋1軒、湯屋1軒、造酒屋河内屋、かたなや勘左衛門、虎や伊左衛門。
	14	蓬萊町	家数40軒、品々商売人なり。
	15	挽路町	家数31軒、品々商人有、金銀銅刀脇差淵頭の細工人金具や。
	16	新石町	19軒、旅人の昼旅籠ととのふ、酒売1軒、塩売1軒。
	17	杉原町	品々商人、細工道具商1軒、鋳物師。
	18	鉄砲町	町並品々、鉢子師宗味といふ塗師有、弓師、鍛冶、造酒や樽や半右衛門。
	19	茂破町	家数20軒、造酒屋錫屋喜平次ト云、傘屋小法師采女と云。
	20	材木横町	左右にうんとん、そばの粉を挽く。
	21	大黒町	家数44軒。
下町	22	上河原町	荒物・木綿類の商家多し、橋元に蛭児社あり、神主上野若狭守といふ、正月廿日、十月廿日祭有之、蛭児の下社家40人余、造酒屋有根津国屋善次郎。
	23	小袋町	上河原町裏、商家品々、作を専とす、売薬あり。
	24	石町	町並左右共、穀商を専とす。
	25	大町	売薬五十嵐与左衛門といふ同1軒、鉄物類商ふ、石屋有、鳥屋有、肴問屋有、塩問屋有、横町に肴を商ふに依之肴町とよぶ、青物有市六才朔日、五日、十日、十五日、廿日、廿五日なり、うんとん屋有。
	26	押切町	商売品々あり、造酒屋吉沢五郎兵衛。
	27	扇町	町並品々商い、道に見せ店江出すもの無也。
	28	新宿町	町並品々、当町ハ宇都宮中にて町巾廣く市も六才有之、商売するもの多し、鍋釜を商ふ者1軒。
	29	今小路町	伊勢や庄右衛門といふ青物を売る、其外品々商人、造酒屋小牧庄右衛門大富人なり。
	30	寺町	町並左右共に古着を商ふ、呉服屋あり。
	31	清巖寺町	新宿町裏、商売、作を専とす、見せ店何もなし。
	32	千手町	菓子屋5、6軒、畳屋、煮売や有。
	33	小門町	
	34	剣宮町	商売人無之、作人ばかり。
	35	小田町	宮嶋町裏、無高。小田町ノ内、明神之供僧居之、瓦焼場所あり。
	36	博労町	
	37	下河原町	
上町	38	新田町	家数19軒、商人板作を専とす。
	39	小伝馬町	左右専糒を商ふ。
		釈迦堂町	町並煮売、茶屋、花作、鍛冶有。

(「宇都宮系図」(森田家文書)より作成)

*宇都宮町人町の各町が付祭りへ繰り出す際の順番のことを町順と示した。

一方で、下町地域の商業にも変化がみられた。大町の六斎市は継続され、近世初期に得た肴問屋の専売権を保持していたが、安永8年(1779)に池上町で魚問屋が店を構えて以来、町々で店売りされるようになり²⁶⁾、専売権は次第に薄れていった。穀屋も、石町ばかりでなく大工町や宮嶋町にも認められる。正

徳元年(1711)に、石町の穀問屋から穀物取扱いの特権を示す由緒書²⁷⁾が出されており、他町における穀屋経営が顕著となってきた動きに対応したものと判断される。下町地域では従来の特権を継承した商業が行われていたが、他町においても営業されるようになるなど、近世中期以降、下町地域の各町が有して

いた特権は次第に曖昧になっていった。

上町地域では、とくに刀や弓など武具を扱う商売が多くみられる。宇都宮城下の武家や参勤交代のために往来する武家等を対象とした生業が、上町地域で展開していたと考えられる。そして、伝馬町・池上町に旅籠屋が集中しており、乗物屋や湯屋、造酒屋、刀屋など、旅籠経営の関連商業もみられた(表1)。造酒屋には、伝馬町の難波屋新右衛門²⁸⁾、池上町の河内屋などがあり、大坂等他国から来たと思われる商人の姿が窺える。新石町では、往来の人々への食事を提供する「昼旅籠」が整えられていた(表1)。このように、上町地域では宿場町としての機能がとくに充実していたことが分かる。それに付随して、上町においても日常品を商う商家が増加していったことが考えられる。

Ⅲ. 祭礼形態の変化

(1) 付祭りの開始

近世以前において、領主宇都宮氏は宇都宮明神の神職としての性格もあわせ持ち、庶流の中里氏や玉生氏等が実際の祭祀にあたっていた。中世における宇都宮明神再建や造営に際しては、慈心院以下の神宮寺の僧侶らが、能楽・田楽等の祭礼を行っていた²⁹⁾。

表2に示したように、宇都宮氏時代から御

祭および法会が年間を通じて行われていた。

中世における祭礼の実態については未解明ながら、法会が目立つのは、当時有力だった神宮寺の関与があったためと推測される。近世に入っても、3月の「花之会」などの法会は残存し、9月の大湯神事は中世における宇都宮神宮寺の大湯屋を、春渡と冬渡の神事は中世の春冬の御祭を、それぞれ継承したものとみることができる。9月9日の流鏝馬も中世の五月会や六月臨時祭で行われていた流鏝馬の流れを汲むものと考えられる。流鏝馬には、「宇都宮御書留」³⁰⁾に「九月九日流鏝馬神事毎年有之、城主より馬四疋貸し候」とあるように、毎年城主から4頭の馬が貸与され、城主も社殿回廊から見物した。近世の城主も、明神祭礼に関与していた。

近世においても中世の明神祭礼が比較的踏襲されたなかで、特徴的なのは、9月9日の流鏝馬神事に付随した「大明神大祭」である。以下、この「大明神大祭」の開始時期、担い手、形態やその変化について明らかにしたい。

近世後期に下野庵宮住が著した『宇都宮史』には、「寛文十二年、冬渡祭より挑灯三四町より出之、同十三年、春渡より町中より挑灯出之、曲師町より十二三之子供、唐人装束ニテ罷出る、同九月大祭始る」とあり、寛文12年(1672)の冬渡の祭礼に、3、4町から提灯を出したのが契機となり、翌年の春渡には町中が参加し、曲師町からは唐人装束をまとった子供らも祭礼行列に加わったという。このようにして、寛文13年(1673)9月に「宇都宮大明神大祭」が開始されるようになったと述べている。さらに『宇都宮故実抄』³¹⁾中の「当社御祭礼之次第」によると、「抑当社(宇都宮明神)九月御祭

表2 宇都宮大明神の諸祭礼

中世		近世
春の御祭	正月 初子午の日	春渡の神事
三月会	三月 十五日	大明神花之会神事
一切経会		
五月会(流鏝馬)		
六月臨時祭(流鏝馬)		
宇都宮神宮寺の大湯屋	九月 初子午の日	大湯神事
九月会(九月九日、池上)	九月 九日	流鏝馬・行列
	〃	大明神大祭
	十月 十五日	大明神小湯神事
冬の御祭	十二月 初子午の日	大明神冬渡の神事

(弘安6年(1283)「宇都宮家式条(第七条)」、寛延2年(1749)「宇都宮町方取扱諸事覚帳」より作成)

礼ねり物屋体等差出候儀ハ、往古御旅夜渡御之節、華籠燈様之物町々より差出来候処、其後追々ねり物等大造ニ相成、町毎に劣らしと華美を競ひしに、夜分の事故、殊之外混乱をしかハ、評議有りて、九月流鏑馬の御祭礼に引付替しものなりとそ、神輿の渡御も無之、只流鏑馬はかり渡りしものなり」とある。宇都宮明神の神輿渡御（春渡・冬渡）の祭礼は夜に行われていたため、町人町からその渡御を照らす提灯（＝華籠燈）を出すようになり、これが練り物の始まりであったとしている³²⁾。町々からの練り物は、その後次第に大規模化し、競って華美となり、夜分に混乱をきたすようになっていったため、町人町からの練り物は9月の流鏑馬神事に伴って行われるようになった。そのため、神輿渡御を欠いた流鏑馬神事のための祭礼であるが、これに付随する形で大祭は行われる、との説明を加えている。

以上の二つの史料から、「大明神大祭」の担い手は宇都宮城下町の町人であったことが判明する。そして、宇都宮の町人は、当初神輿の渡御される冬渡・春渡の祭礼に参加していたが、その練り物を大がかりにしていくにしたがって、9月の流鏑馬神事の際に出し物を行うようになった。このように、町人側からの「大明神大祭」は、神輿渡御や流鏑馬等に付け加わるようにして行われていたので、当時、これを「付祭り」と称していた。

付祭りは、大凡1年おきに行われていた³³⁾。宇都宮明神の旧神官、中里千族が記した神事と町方祭礼に関する明治維新以前までの覚書である「二荒山神社菊水之神事之外記録（以下「記録」と略記する）」³⁴⁾には、「附祭り出さざる時ハ蔭祭りと唱、大神楽・榊・猿田彦・鉾・獅子斗出る」とあり、付祭りが行われない年は、これらの出し物だけが9月の流鏑馬神事に供奉していたことがわかる。さらに、幕末期に描かれた「宇都宮二荒山祭礼図絵」³⁵⁾をみると、冬渡における町人町への

神輿渡御の際、実際に猿田彦や鉾等の出し物が神輿に供奉する様子が描かれている。神輿は、各町の出す数々の提灯に囲まれて巡行し、それに猿田彦・鉾等が連なっていた。このように、幕末期の冬渡において町中から供奉されていた出し物は、提灯・猿田彦・鉾等であり、これらは神事的な要素を持ち、付祭りの開始当初から存在していたと考えられる。それゆえに付祭りの実施されない年でも、毎年欠かさず供奉された。

(2) 近世中期の付祭りの変化

宇都宮明神祭礼に関して、近世前・中期の様子を示す史料は僅かであるが、町年寄森田氏の記録「宇都宮系図」には、付祭りの出し物についても一部記されており、近世前期から中期の付祭りの内容を検討する手がかりとなる(表3)。また、宇都宮の有力商家に受け継がれている幕末期の祭礼絵巻は、当時の付祭りにおいて各町から実際にどのような練り物が行われていたのか、その雰囲気視覚的に捉えることのできる好史料である(図2)。このような史料が記され、継承されてきたことは、宇都宮の町人が付祭りに大きな関心を寄せていたことの証左となろう。

ここでは表3をもとに宇都宮明神祭礼の付祭りの形態変化について考察を試みたい。1670年代に提灯を供したことに始まった町々



図2 幕末期における宇都宮明神の付祭り

(弘化4年(1847)「二荒山大明神御祭礼絵図附祭全」(崎尾家文書)より一部を転載)

表3 近世中期における付祭りの町順と出し物

	町順	町名	出し物の内容
下町	1	馬場町	繻, 人形屋台
	2	宮嶋町	出し, 花駕一挺, 美を尽シ
	3	大工町	踊屋たい
	4	日野町	高砂尉
上町	5	池上裏町	出し, 芸屋たい
	6	伝馬町	出し, 龍人
	7	熱木町	人形屋たい
	8	(南) 新町	月の出, しやくま
	9	材木町	出し, 鹿紅葉彦馬屋台踊
	10	曲師町	出し, 唐人から子
	11	歌橋町	出し, 小弓負子供7人
	12	本郷町	人形屋台, ほろ7人
	13	池上町	出し, 屋台
	14	蓬莱町	出し, 志やくま
	15	挽路町	出し
	16	新石町	人形屋台
	17	杉原町	唐船屋台
	18	鉄砲町	布袋唐子
	19	茂破町	出し, 鎧武者
	20	材木横町	ほろ武者7人
下町	21	大黒町	出し, しやくま
	22	上河原町	ほこ出, 猿田彦
	23	小袋町	出し, ひこ馬小奴子15人
	24	石町	出し, ほこ
	25	大町	出し, 屋台大奴子
	26	押切町	屋台
	27	扇町	舟屋たい
	28	新宿町	大黒屋たい
	29	今小路町	雪ころばし人形屋台
	30	寺町	出し, 屋台
	31	清蔵寺町	人形屋たい
	32	千手町	出し, 矢くるま
	33	小門町	出し, 旗
	34	劔宮町	旗
	35	小田町	旗
	36	博労町	旗
	37	下河原町	旗
上町	38	新田町	旗
	39	小伝馬町	旗

(「宇都宮系図」(森田家文書)より作成)

*付祭りのなかで, 神事的内容を持つ出し物を太字で示した。

からの付祭りは, いかなる変化を遂げていったのだろうか。

17世紀末から寛延年間(1748~50)までの, いずれかの時点における付祭りの内容を示すと考えられる「宇都宮系図」に記された付祭りの記載からは, 幾つかの祭礼形態の混在が指摘できる。一つは, 歌橋町(11番)の「小弓負子供七人」や本郷町(12番)の「ほろ七人」, 小袋町(23番)の「小奴子³⁶⁾十五人」の

ような, 武者装束で行列を為す練り物の類である。これは, 江戸や川越³⁷⁾, 烏山においても近世前期にみられた古風な風流であり³⁸⁾, 宇都宮においても行列で練り歩くこの形態が流行したことを推測させる。

二つめの祭礼形態は, 人形等の「出し」³⁹⁾である。表3をみると, 計10町が人形の屋台や出しを繰り出していたことになり, 宇都宮で流行していた祭礼形態であったことが窺える。江戸における享保年間(1716~36)以前の山車の形態は, 草花や人形の飾り物を主としており⁴⁰⁾, 宇都宮の「出し」や「人形屋台」は, 江戸の祭礼文化の影響を受けている可能性がある。

三つめの祭礼形態は「芸屋台(=踊屋台)」であり, 踊りをともなう屋台である。表3において, 単に「屋台」と示されるものの実態が芸屋台であった可能性もある。寛延2年(1749)の藩の町政史料である「宇都宮町方取扱諸事覚帳」⁴¹⁾には, 「一, 当月(八月)中旬頃より来九月明神祭礼之節, 芸為仕, 但江戸並近在より役者・浄瑠璃語・三味線挽等指置度願町々より差出候へは, 役者承届祭礼相済罷帰候節, 名主共役所へ届出候事」とあり, 町人が役者や浄瑠璃語等を江戸や近在から雇い入れて芸屋台を行うことが, 18世紀半ばに常々あったことを示している⁴²⁾。

宇都宮明神祭礼における付祭りの形態は, 17世紀末には「母衣武者」等の装束行列であった練り物に, 人形を飾った「出し」が加わっていったと推測される。そして18世紀中葉以降, 役者や唄い方を雇い入れて興行する芸屋台が盛行されるようになった。このような祭礼形態の変容は, 江戸と類似する点が多く, 宇都宮の付祭りにみられる形態の変容は, 少なからず江戸の祭礼文化の影響を受けた結果であると想定される。

IV. 付祭りにみる町人町内部秩序の変容

(1) 付祭りの町順

表4 弘化4年(1847)における付祭りの町順と出し物

	町順	町名	出し物の内容
下町	1	馬場町	榊白張之仕立。上棟柱立ノ出シ。子供半纏ニて鳶仕立。芸屋台。常磐津連中・三弦連中・ハヤシ連中・芸子連中。
	2	宮嶋町	天狗ノ出シ。芸屋台。常磐津小文字太夫・同駒太夫・同須磨太夫。三弦岸沢連中・ハヤシ連中・長唄連中・芸子連中。
	3	大工町	鉢三本、鷹ノ鈴附。出シ。芸屋台清元延寿太夫・同理善太夫・同古志太夫。三弦、清元鷹兵衛・同ハヤシ連中・芸子連中。
	4	日野町	高砂出シ。獅子。芸屋台。常磐津佐喜太夫・同国太夫・同三国太夫。三弦、岸澤連中・同長唄連中・ハヤシ連中・芸子連中。
上町	5	裏町	牛引物。屋台。ハヤシ連中。
	6	伝馬町	剣赤熊ノ出シ。芸屋台。常磐津連中・三弦連中・ハヤシ連中・長唄連中・芸子連中。
	7	熱木町	熊坂ノ出シ。
	8	南新町	糸揃ノ出シ。屋台。ハヤシ連中。
	9	材木町	行列、頼朝公富士ノ捲狩学。屋台。ハヤシ連中。
	10	曲師町	加藤清正出シ。出シ。唐船ノ屋台。
	11	歌橋町	出シ。
	12	本郷町	浦嶋ノ人形出シ。屋台ハヤシ連中。
	13	池上町	練物唐人ノ学。布穀。出シ。芸屋台。延寿太夫改清元太兵衛・同美芳喜太夫・同家名太夫・同名美太夫・同簾寿太夫。三弦、清元千歳・同千吉。長唄連中・三弦連中・ハヤシ連中・芸子連中。
	14	蓬萊町	出シ。武蔵ノ。
	15	挽路町	花籠出シ。屋台。ハヤシ連中。
	16	新石町	遊太鼓出シ。芸屋台。清元延寿太夫・同喜勢太夫・同富士太夫。三弦、清元連中・ハヤシ連中・芸子連中。
	17	杉原町	武蔵野。出シ船。屋台。ハヤシ連中。
	18	鉄砲町	御鏡。出シ。屋台。ハヤシ連中。
	19	茂破町	龍宮ノ学。芸屋台。清元連中・ハヤシ連中・芸子連中。
	20	材木横町	剣赤熊。
	21	大黒町	出シ。武蔵野。
下町	22	上河原町	柳鞠出シ。芸屋台。富本斎宮太夫・同立瀧太夫・同菊太夫・同志津太夫。三弦、名見崎喜惣次治・同喜高。ハヤシ連中・芸子連中。
	23	小袋町	武蔵野。花屋台。ハヤシ連中。
	24	石町	芭蕉出シ。芸屋台。清元志喜太夫・同志津太夫・同小志太夫。三味線、清元房之助。ハヤシ連中・長唄連中・芸子連中。
	25	大町	芸屋台。常磐津菊太夫・同組太夫・同壽美太夫。三味線、岸沢連中同・長唄連中同・ハヤシ連中・芸子供連中。
	26	押切町	芸屋台。清元政太夫・同涅太夫・同名尾太夫。三味線、同万吉・ハヤシ連中。
	27	扇町	剣赤熊万度。
	28	新宿町	唐扇唐人人形。
	29	今小路町	剣赤熊万度。
	30	寺町	四方面屋台。剣赤熊、寶松七福神人形出シ。ハヤシ連中。
	31	清巖寺町	赤熊。
	32	千手町	柏万度。
	33	江野町・小門町	(記載なし)
	34	小田町	鉢。
	35	鍛宮町	鉢。
	36	博労町	花屋台。
	37	下河原町	屋台。行列之練物。
上町	38	新田町	屋台。狐之嫁入練物。ハヤシ連中。
	39	小伝馬町	剣赤熊四神出シ。ハヤシ連中。

(弘化4年(1847)「二荒山大明神御祭礼絵図附祭全」(崎尾家文書)より作成)

*付祭りのなかで、神事的内容を持つ出し物を太字で示した。

表4は、弘化4年(1847)における宇都宮明神祭礼を描いた絵巻(図2)を読み解き、幕末期の付祭りにおける各町の出し物の内容を示したものである。表3、4を比べてみると、付祭りには、宇都宮町人町全40町のうち

39町が参加し⁴³⁾、その町順は一定であったことがわかる。付祭りへ繰り出す町順が定められた経緯については不明ながら、表3にみるように、近世中期にはすでに一定の町順が決められていたと考えられる。

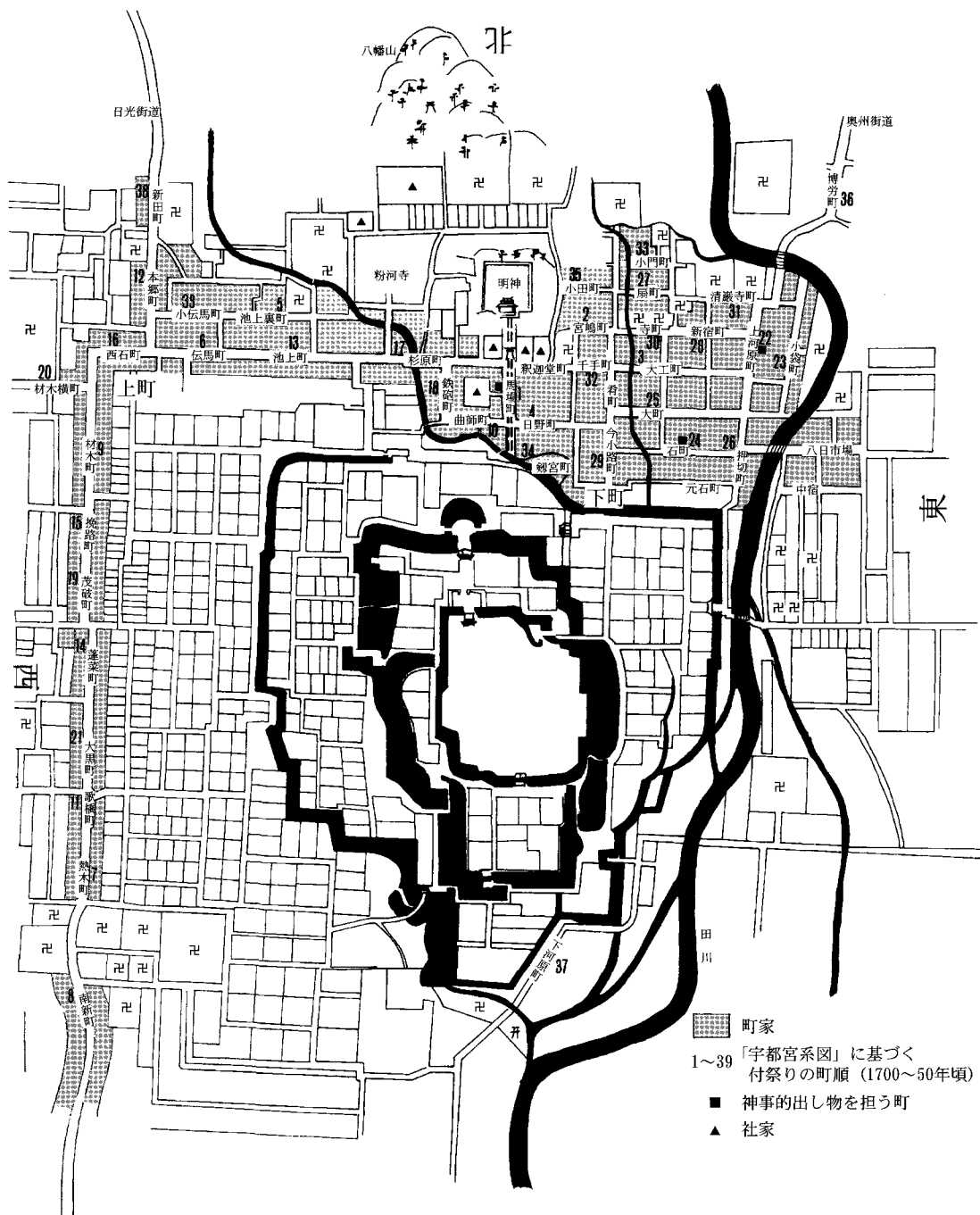


図3 近世中期における付祭りの町順

(寛文8年(1668)~天和元年(1681)「下野国宇津宮城下之図」より作成)

付祭りの町順を詳細にみると、1番の馬場町をはじめ、宮島町・大工町・日野町など宇都宮明神門前部に位置する町々が早い順番を占めている(図3、図4参照)。この4町は下町地域の一部にあたる。明神門前部という点

では、曲師町や鉄砲町・杉原町など、上町地域の町が早い順番を占めても不思議ではない。付祭りの先頭が下町地域の4町であったことに留意したい。

次に、町順の5番から21番までを占めたの

は、全て上町地域の各町（合計17町）であり、つづく22番から37番までが全て下町地域の各町（合計16町ないし17町）で占められており、町順に上町、下町という地域的な競合関係と優劣が示されていた可能性がある。上町、下町の両地域において、付祭りに繰り出される町数は、ほぼ拮抗していたことが指摘できる。また、付祭り町順の最後尾は上町地域の新田町と小伝馬町が務めていたことがわかる。

このように付祭りの町順をみると、宇都宮町人町を大きく二分する下町地域と上町地域とが、先頭（下町の明神門前部4町）－上町（17町）－下町（17町、ないし16町）－最後尾（上町の2町）というように、下町と上町という地域のまとまりとその対比が表れていることが指摘できる。付祭りの町順は、かなり人為的に定められたものと推測される。付祭りの町順には、上町・下町両地域における均衡のとれた発展を意図した城主の意向が反映されていた可能性もある。現在では、付祭りは行われなくなっているが、10月28、29日に行われる菊水祭⁴⁴⁾には神輿が上町・下町の両方を一日ずつ渡御する⁴⁵⁾。近世以降の町域の名残が、現在の神輿渡御にもみられるといえよう。

(2) 神事的出し物を担う町

前述したように、榊・猿田彦・鉾等は、付祭りの行われる年に限らず、毎年供奉される特殊な出し物であった。一般的に、神輿渡御行列における先払いの意味合いを持つ榊・猿田彦・鉾・獅子等の出し物を、本稿では付祭りにおける「神事的出し物」と呼ぶこととする。これらが供奉されるようになった時期は定かでないものの、付祭りの開始当初から存在していた可能性は高い。

神輿渡御の際にも欠かせない神事的出し物を供奉していたのはどのような町であったのか。さらに、その町々の特徴とはいかなるも

のであろうか。

表3をみると、近世中期には馬場町（1番）が榊を、上河原町（22番）が鉾と猿田彦を、石町（24番）が鉾を出しており、これらが神事的出し物を担う町であったと考えられる（図3参照）。次に、表4で幕末期の付祭りの神事的出し物について注目すると、馬場町は変わらず榊であるが、宮嶋町（2番）が天狗（＝猿田彦）を、大工町（3番）が鉾、日野町（4番）が獅子を担うなど、町順の先頭4町に神事的出し物が集中していることが指摘できる（図4）。文化14年（1817）の「祭礼町々評判記」（以下、「評判記」と略記する）⁴⁶⁾をみると、猿田彦（天狗）はすでに宮嶋町の出し物として定着しているが、石町では文化14年においても鉾を出していたことが確認される（表5参照）。上河原町や石町において出されていた神事的出し物は、近世後期に徐々に町順先頭の4町に集中していったと考えられる⁴⁷⁾。さらに表4をみると、町順の早い4町の他にも、小田町（34番）や釧宮町（35番）など下町地域の数町が鉾を出している。このように、近世中・後期を通してみると、町順の先頭4町をはじめ下町地域の町々が神事的出し物を担っていたということが出来る。下町地域の町々による神事的出し物の供奉は、これらが宇都宮明神との関わりを相対的に深く持った町場であったことを推測させる。宇都宮明神の旧神官、中里千族が記した神事ならびに町方祭礼に関する明治維新以前までの「記録」⁴⁸⁾によれば、流鏝馬の神事行列における「町方供奉之方」として、新宿町の菊地延太夫による大神楽、馬場町による榊、宮嶋町による猿田彦（2人）、大工町やその他の下町地域の数町による鉾、日野町の獅子（2頭）が連なり、その後、町方からの付祭りが続いていた。

付祭りに参加した39町の集合場所は、宇都宮明神門前部の馬場町であった。付祭り初日（9月9日）の興行は「馬場揃え」と称し、馬

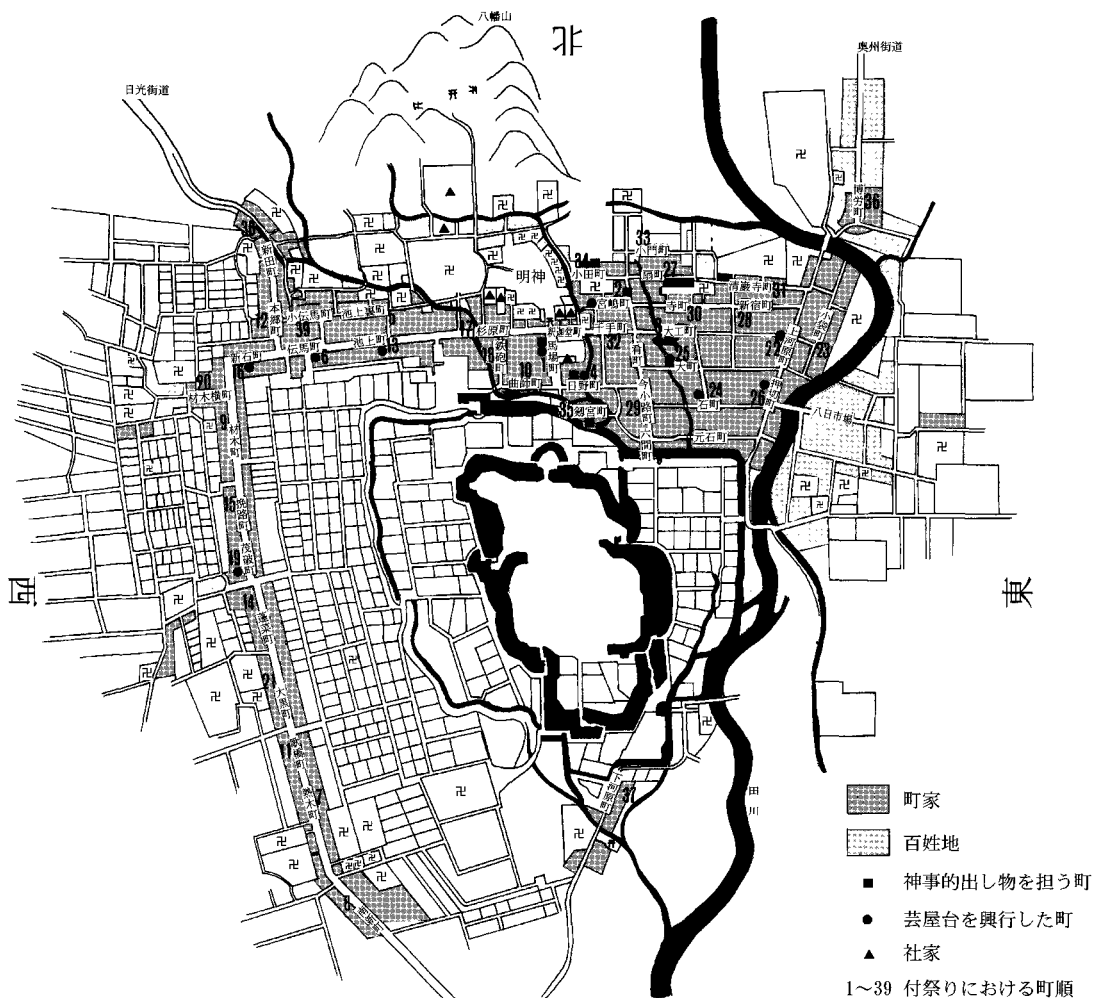


図4 弘化4年(1847)の付祭りにおいて芸屋台を興行した町の分布

(慶応年間(1865~68)「宇津宮御城内外絵図」より作成)

場町は最初の付祭り興行の場でもあった。この町順1番の馬場町をはじめとして4番までの町は、いずれも下町地域のなかでも明神門前部に位置し、城と近接した宇都宮城下町の中央部を占める町々であった。下町地域のなかでも、馬場町・宮嶋町・大工町・日野町における付祭りの町順の早さは、下町地域の明神門前部における町場としての成立の早さと、明神との結びつきの強さや、日野町に代表されるような城主からみた町場としての重要性を示している可能性がある。

(3) 近世後期の祭礼評判と町順変容

下町地域は旧来より商業的特権を有し、付祭りにおいては神事的出し物を担うなど、町場としての伝統性や優位性を示していた。一方で、上町地域においても宇都宮の宿場町としての商業的發展がみられたが、付祭りではいかなる特徴を示していたのであろうか。最後に、近世後期における付祭りの実態を明らかにすることにしたい。

幕末の宇都宮明神の付祭りを描いた絵巻を

みると、「芸屋台」(＝歌舞伎)を出す町が12町に及んでおり(表4、図4)、近世中期以降から幕末にかけて、宇都宮では芸屋台が流行したことが窺える。神主の「記録」によれば、文政年間(1818～29)には芸屋台が17町も出来、3日ばかりで付祭りを行っていた。芸屋台上の歌舞伎をみせる芸場は、13ヶ所設定されていた⁴⁹⁾など、付祭りに芸屋台を行うことが近世後期においていかに盛んであったかが窺える⁵⁰⁾。

文化14年(1817)の「祭礼町々評判記」⁵¹⁾からも、当時の宇都宮における芸屋台の流行ぶりが読みとれる。「評判記」は、付祭りでの人気の高い順に1番から11番の町まで挙げ、各町毎の趣向を和歌に詠んで評価した興味深い史料である。

表5をみると、付祭りにおける町々の評判が、上述してきたような町順や上町・下町の地域区分とは無関係であることがわかる。宮嶋町の付祭りの内容を評価した和歌に「高慢

に鼻高々と空屋鉢、おさだまりなる猿田彦かな」とあるように、歌舞伎を伴わない「空屋台」を出した町々は概して手厳しい評価をうけている。11番の評価を与えられた石町も、従来よりの伝統で神事的な「鉦」を繰り出していたが、石町には穀屋が多く存在したことにかけて、その付祭りの内容には「三升どころかみんな空(中身がない)」との厳しい評価がつけられた。このように、「評判記」では、猿田彦や鉦などの神事的出し物に積極的な評価がなされていなかったことが窺われ、むしろ、芸屋台における踊や趣向の良さ、面白さが町人や見物人らの注目の的となっていたことがわかる。本来重要であった神事的出し物は脇役となり、代わって余興の一つであった歌舞伎が脚光を浴びるようになっていた。すなわち、神輿や神馬に供奉することで示される町の優位性よりも、むしろ、付祭りにおいて趣向の凝らしがいのある芸屋台に、町人も見物人も共に価値をみいだしていった様子が

「評判記」の記述から窺える。

表4をみると、先頭の4町の場合も、神事的出し物の他に、芸屋台などさまざまな趣向を行っている。同様に、近世中期には猿田彦や鉦を供していた上河原町や石町が、幕末期にはこれらを全く出さなくなっており、下町地域の町々においても芸屋台へと傾倒していった動きをみて取れる。

文化14年(1817)の「評判記」において、歌舞伎とその趣向ともに一番の評価を受けたのは伝馬町であった。伝馬町は和歌に「いつもかわらぬ一の祭礼」とあるように、常々より評判が高い町であった。伝馬町は具体的にどのよ

表5 文化14年(1817)における各町の祭礼評判

祭礼評判	町順・町名	和歌
1番	6 伝馬町	けい(芸)もよししゆこふ(趣向)もてんと伝馬町 いつもかわらぬ一の祭礼 七夕の踊もよしやかちの葉に てんとあてたる一のひやう判(評判)
2番	26 押切町	子も口屋鉢もよしや押切の 一番うたてはねた祭礼
3番	13 池上町	十二文舞いましやうかと云ふ師子を ひとりたんとはたく池上
4番	18 鉄砲町	あけましたひらき屋鉢に里木うり 鉄砲玉の踊にぞよし
5番	22 上河原町	時平(藤原時平)といへと踊りハ一のけい むかしのはちをす々久評判
6番	4 日野町	いそかしくぞうりをはいて庭おとり どさくさとしてけい(芸)はわからぬ
7番	3 大工町	ふ口な子供けいこに空屋鉢 しゆ事なしの御祭礼かな
8番	1 馬場町	松たけのにほひがぬけて田舎神子 踊のけい(芸)そ馬場町と見る
9番	25 大町	おとりてはあたためぬものと思ひきり かつらてあてて人をなかせ
10番	2 宮嶋町	高まんにはな高々と空屋鉢 おさだまりなる猿田彦かな
11番	24 石町	かた／＼とふりたつれともほこばかり 三升所かみんなからまつり

(文化14年(1817)9月「祭礼町々評判記」(観専寺文書)より作成)

表6 安政6年(1859)伝馬町町人による江戸芸子連の雇い入れ

月 日	金 額	用 途 内 訳
8月25日	1貫50文	天気、九ツ時出立。 小金井金子や泊、旅籠代3人分払。
26日	金1朱ト76文 1貫850文	朝ハツ時小金井出立。 松戸より千住まで。 千住より江戸まで、籠3口。
27日	916文 金1朱 250文	天気、朝ハツ時頃江戸着。 江戸浅草遠州屋、旅籠代、3人分払。 右宿へ釜代。
28日	金2朱50文 金1分 280文 金2朱16文 金2朱 金2朱ト450文 1貫550文 金20両	大伝馬横町立口茶や朝飯代、2人分払。 天気。 酒肴茶代共、直次郎共4人分払。 踊子6人共茶代。 宿にて夕飯2人分払。 大伝馬横町、万久、昼喰4人分。 踊子3人分菓子折入ニテ銘々遣候分。
9月1日	金4両 金1両 金2朱	酒肴代、佃煮代払。 酒肴代昼飯4人分。 踊子3人、太夫3人、三味線2人、かつら師1人、 小道具方1人、手付金、宮路斎相渡ス。 はやし方請負人、六郎、新三郎へ手付金渡ス。 浄瑠璃作者、狂言礼共遣わす。 小道具方松次郎へ代金渡す。
2日	680文 金2分2朱ト525文 480文 金1分 金1分2朱ト1貫 300文	天気。 昼喰代4人分払。 踊子并諸芸人手合の節、酒肴代、万久へ払。 夕飯2人分。 踊子衣装付之節諸入。 宮路斎方にて芸人酒肴振舞分。
3日	金口 金2両 金20両 金1両3分 金口両 1両2朱280文 金1分 200文 600文 550文 金1分ト550文 700文 550文 200文 金2朱ト300文 1貫50文 325文 金1分ト232文	天気、江戸出立。 太夫・三味線・はやし方着付14枚、はかま13枚代、 大丸屋へ払。 六郎、新三郎へ請合之内、2度目渡す。 踊子衣裳指料、新和泉町三河屋へ払。 後見源口請金、宮路斎へ渡皆済。 踊子一条方世話ニ被成候ニ付、都賀太夫直次郎へ肴代。 旅籠代5人分。 右同断、茶代遣わす。 直二郎、荷本馬1疋、和泉町より両国まで車力賃銭。 両国より千住大橋まで船賃。 越谷より粕壁まで駄賃払。 粕壁より古河まで(馬2疋)。 大雨降、幸手より上口野まで踊子連駕籠笠銭。 千住、昼食5人分払。 千住幸手屋、茶代。 踊子乗馬3疋、千住より越谷まで払。 千住より越谷まで馬2疋駄賃。 草加、昼飯代払。 越谷大松屋、旅籠并酒肴茶代。
4日	636文 1貫700文 572文 265文 300文 1貫100文 金2朱	曇り、昼頃大雨。 粕壁三姉屋、酒肴代払。 粕壁より幸手まで馬4疋代賃銭払。 傘3本代払。 古河まで船渡2ヶ所賃銭。 踊子、水菓子代。 古河大黒屋、旅籠代払。 右宿茶代。
5日	1貫250文 1貫100文 1貫212文 650文 金201分 700文 金2朱ト600文	天気。 古河より小山まで馬2疋賃銭払。 小山より石橋、馬2疋賃銭払。 石橋、昼食9人分、茶代共。 石橋より雀宮まで馬2疋賃銭。 幸手より雀宮まで踊子かご代。 雀宮より当所まで馬2疋。 古河儀、酒肴代、諸芸人へ振舞分。

(安政6年(1859)「御祭礼附祭踊仕様諸入用帳」(伝馬町自治会文書)より作成)

うな付祭りを行っていたのであろうか。伝馬町に残されている自治会文書を手がかりに、当時宇都宮の各町で流行した「芸屋台」興行の実態を、以下、明らかにしたい。

安政6年(1859)の「御祭礼附祭踊仕様諸入用帳」⁵²⁾には、当年の伝馬町の芸屋台興行に際し、踊り手や囃子方を雇い入れるための旅程に費やした諸入用が記されている(表6)。伝馬町町人の手塚五郎兵衛・まつ屋喜兵衛・い称屋善吉⁵³⁾は、江戸日本橋(大伝馬町)に向けて8月25日に宇都宮を出立し、9月5日に戻ってきており、旅はまさに9月9日からの付祭りにあわせるように行われていた(図5)。江戸の日本橋では、踊子3人、唄い方(太夫)3人、三味線弾き2人等を雇い入れているが、彼らの手付金と踊子の衣装代に判明する限りで40両以上も費やしている。その他にも、踊子等への食事や酒、茶菓の振舞い、残暑や雨天のため駕籠代を払うなど、様々な心配りを行っている。伝馬町は、元締めとみられる「宮路斎」なる人物とのつながりを通して芸子連を雇い入れていたと考えられる。踊子等へのもてなしの様子からも、歌舞伎興行を成功させ、これを継続させたいとする伝馬町町人の配慮が窺える。9月1日には浄瑠璃作者(歌舞伎の台本作者)にも礼金を渡している。伝馬町の芸屋台の趣向の良さは、このような江戸芸子連との結びつきによってもたらされていたといえる⁵⁴⁾。

伝馬町の町名主および本陣を務

とんど変化はなかった。

次に付祭りの内容を検討したところ、宇都宮明神の付祭りは1年おきに行われていたが、榊・猿田彦・鉾等の神事的出し物の供奉だけは毎年なされていた。これらの神事的出し物を担う町は、近世中期から幕末期にかけて、馬場町や宮嶋町、上河原町や石町等の下町地域の町々であったことが特徴的であった。下町地域のなかでも、宇都宮明神門前部や、市が開かれていた上河原町や穀屋が集中した石町付近は、とくに伝統的な町場であり、これらが祭礼における神事的出し物を担っていたことから、下町地域と宇都宮明神、ひいては宇都宮城主との旧来よりの深い関係性が想定される。

商業的側面では、城下町整備時に形成された上町地域が、近世初期以降、旧来より商業機能を有してきた下町地域と対等な位置づけとなっていた。しかしながら、付祭りという祭礼形態の側面から宇都宮町人町における力関係を捉えてみると、近世をとおして神事的出し物を担い続けるなど、あくまでも下町地域が上町地域よりも優位に立つという秩序が、近世後期に至るまで保たれていたことが指摘できる。このように旧来よりの下町の特殊性や優位性が付祭りにおいて長く示されつづけたことは、宇都宮町人町の特質の一つといえよう。

各「町」単位で出した付祭りの内容は、17世紀末に奴や武者行列などの練り物から、次第に人形の「出し」が中心になったと推測され、19世紀初頭には、歌舞伎を伴う芸屋台が主流となっていた。芸屋台は興行する町人にとっても見物人にとっても、最も魅力的であったようで、「評判記」なる祭礼番付まで出された。旅籠屋が集中していた上町地域の伝馬町では、有力商家がその分限に応じて寄付を行い、江戸の芸子連を買い入れるなど、当時流行の芸屋台を行っていた。文政年間(1818~29)には、このような芸屋台が合計17

町も並び、神事的出し物を出していた下町地域の各町においても、文化・文政期には盛んに芸屋台を行うようになっていた。付祭りにおいて興行の要素が増すにつれ、各「町」を単位とする結束こそが重要となり、上町・下町という地域の別は薄れていき、この両地域をもとに区分されてきた町順も、明治期に入ると大きく変化していった。

残された課題は多く、とくに、上町・下町というそれぞれの地域内部における付祭りでの協力や力関係などを明らかにすることが出来なかった。また、近世後期の宇都宮の各町における付祭りが、芸子連の買い入れにみられるように江戸との強い結びつきをもって成り立っていたことを指摘したが、宇都宮明神祭礼をとりまく周辺地域との地域間関係を導くことが出来なかった。祭礼を通して、より面的な地域社会の実態に迫ることも重要と考えている。これらについては今後の課題としたい。(三重大学・非)

【付記】

本稿作成にあたり、筑波大学歴史・人類学系の石井英也先生、小口千明先生、日本女子大学文学部の伊藤寿和先生にご指導を賜りました。現地調査の際には、栃木県立文書館の皆様、宇都宮市教育委員会文化課の小松俊雄氏、栃木県立博物館学芸部の船木明夫氏に便宜を図っていただきました。また、伝馬町自治会の越野高延氏をはじめ伝馬町の皆様、宮嶋町の増渕幹男氏、日野町の崎尾氏には貴重な史料の閲覧をご許可いただいた上に数々のご教示を賜りました。英文要旨の校閲では三重大学人文学部の中川 正先生に大変お世話になりました。以上記して厚く御礼申し上げます。

本稿の骨子は、平成12年(2000)9月の近代日本の地域形成研究グループ研究会(於：法政大学)で発表させていただいた。

【注】

- 1) 黒田日出男「〈祭り〉の時代としての近世」、土浦市立博物館編『にぎわいの時間－城下町

- の祭礼とその系譜 - 』、土浦市立博物館、1993、50～54頁。同「都市祭礼文化研究の現在」、川越市立博物館編『川越氷川祭礼の展開』、1997、川越市立博物館、5～12頁。久留島 浩「近世における祭りの『周辺』」、塚本 学・宮田 登編『日本歴史民俗学論集5 都市の生活文化』吉川弘文館、1993、186～204頁。牧田 勲「近世都市祭礼の成立と解体 - 楽園の幻影 - 」、歴博84、1997、13～17頁。
- 2) 高牧 實「港町酒田と祭礼」、渡辺信夫編『近世日本の都市と交通』、河出書房新社、1992、143～160頁。
 - 3) 高牧 實『近世の都市と祭礼』、吉川弘文館、2000、342頁。
 - 4) 神田由築『近世の芸能興行と地域社会』、東京大学出版会、1999、408頁。
 - 5) 関戸明子・木部一幸「館林城下町の形成過程と地域構成」、歴史地理学38-4、1998、1～20頁。
 - 6) 渡辺康代「近世城下町における祭礼形態の変容 - 下野国那須郡烏山を事例として - 」、地理学評論72A-7、1999、423～443頁。
 - 7) 山本隆志「鎌倉時代の宿と馬市・馬喰」、筑波大学歴史・人類学系『年報日本史叢』、1999、17～33頁。江田郁夫「中世都市宇都宮について」、栃木県立文書館研究紀要第3号、1999、61～72頁。阿部 昭「宇都宮城下町」、『城下町古地図散歩9 江戸・関東の城下町』、平凡社、1998、136頁。また、寛永10(1633)年に作成された「国絵図」において、宇都宮東部の田川沿いに街道が通っているのが確認できる。
 - 8) 高野山清浄心院の過去帳から、慶長18年(1613)には日野町人の名を確認することが出来る。
 - 9) 『宇都宮故実抄』、国立国会図書館蔵。国立国会図書館蔵の『宇都宮故実抄』は明和8年(1771)の写本であることから、『宇都宮故実抄』は少なくともそれ以前の編纂書と考えられる。また、明和8年の写本には以後の書き加えもある。
 - 10) 宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史中世史料編』、宇都宮市、1980、178～185頁。
 - 11) 天文7年(1538)「慈心院造営之日記」、宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 中世史料編』、宇都宮市、1980、185～191頁。
 - 12) 元文年間(1736～40)「宇都宮町方書上帳」、宇都宮市上河原町 高橋保三郎家文書。
 - 13) 前掲9)。
 - 14) 前掲9)、および下野庵宮住(本名、上野久左衛門)の著した『宇都宮史』(宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近世史料編I』、宇都宮市、1980、249～259、371～374頁)による。『宇都宮史』は、狂歌師の下野庵宮住が近世後期にまとめた歴史および地誌の書である。
 - 15) 新宿町に市が移った後も、初市は上河原町において開かれ、市祭が執り行われていた。
 - 16) 正徳元年(1711)「覚」(享保13年(1728)「宇都宮御書留」、国立国会図書館蔵)。
 - 17) 『宇都宮故実抄』や『宇都宮史』などにおいても、宇都宮の町人町を「上町」「下町」とに分けて総称しており、近世当時の一般的な呼称であったと思われる。
 - 18) 『宇都宮故実抄』、『宇都宮史』。元和6年(1620)、本多正純は宇都宮の隣村である鶴田村地内を秣場として材木町・材木横町・引路町・茂破町・蓬萊町・大黒町・歌橋町へ下していた。このことから、上町の各町が城主による計画のもと新たに形成された街区であったことが窺える。また、この年に池上町が分割されて伝馬町・西石町が成立し、池上裏町から小伝馬町が成立した。
 - 19) 『宇都宮故実抄』、『宇都宮史』をみると、慶長8年(1603)には問屋場は「東石町ニ而相勤る、東石町ハ今之石町なり」とあるが、元和5年(1619)の条には「東石町(=石町)問屋場、伝馬町へ引」とあり、下町の石町にあった問屋場は、伝馬町へ移されていった。
 - 20) 前掲14)。
 - 21) この「森田伝兵衛」が、「宇都宮系図」を記した註23)、24)の森田家の先祖である可能性が高い。
 - 22) 高野山清浄心院の過去帳には、寛永5年(1628)に「大町 植木半左衛門」とみえ、実際に町年寄の植木半左衛門は下町側の大町に居住していたことが判明し、『宇都宮史』

の史料内容と合致する。

- 23) 森田家の系図には「本国奥州会津、初山崎氏」とあり、始祖「家喬 左京亮」が天正元年（1573）に宇都宮で没していることから、戦国期に会津から転入した家であることが窺える。
- 24) 宇都宮市伝馬町、森田保家文書。
- 25) 「宇都宮系図」は、全て同筆で書かれているため、寛延年間（1748～50）までに同一人物（森田氏）によってまとめられた記録と考えられる。
- 26) 『宇都宮史』、宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近世史料編Ⅰ』、宇都宮市、1980、373頁。
- 27) 前掲16)。
- 28) 難波屋は、近世後期より本陣を務めた上野新右衛門家の屋号である。
- 29) 前掲11)。
- 30) 享保13年（1728）「宇都宮御書留」、国立国会図書館蔵。
- 31) 前掲 9)。
- 32) 近世中期における宮嶋町の付祭りの出し物のなかに「花駕」がみられる（表3参照）。これが、町人町からの付祭りにおける最も初期的な出し物の「華簞燈」と同様のものである可能性が高い。
- 33) 前掲14)。「隔年二町中より祭礼渡り物出し候」とある。
- 34) 明治42年（1909）「二荒山神社菊水之神事之外記録」、宇都宮二荒山神社文書。
- 35) 高田真直の筆により、文久元年（1861）に完成した。二荒山神社編『宇都宮二荒山神社図録編』、1988、118頁。
- 36) 奴とは、主人の行列に鑓・長柄・挟箱などをもって供先を勤めた者を示し、大名行列を模倣した練り物であったと考えられる。
- 37) 川越市立博物館編『川越水川祭礼の展開』、川越市立博物館、1997、48～49頁。
- 38) 前掲 6) 433頁。
- 39) 表3には、伝馬町の出しものに「龍人」とあるが、文政10年（1827）における伝馬町の「屋舩並出し諸道具預ヶ帳」（上野家文書、宇都宮大学附属図書館蔵）にも「出し」として「龍王諸道具」があり、「宇都宮系図」

の記載と合致する。このことから「宇都宮系図」に記された祭礼内容は信憑性のあるものと思われる。

- 40) 四日市市立博物館編『祭礼・山車・風流－近世都市祭礼の文化史－』、四日市市立博物館、1995、35頁。
- 41) 寛延2年（1749）「宇都宮町方取扱諸事覚帳」、宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近世史料編Ⅰ』、宇都宮市、1980、284～301頁。
- 42) 芸屋台は烏山においても盛んに行われた祭礼形態であるが、宇都宮の芸屋台では役者連そのものを江戸や近在から雇い入れており、主に馬頭など隣接地域から指南を呼び、町人自らが芸を習得していた烏山での芸屋台とは異質であったと考えられる。また「宇都宮系図」には、芸屋台を行ったのは3町しかみられないことから、この記録が寛延年間（1748～50）より以前の祭礼内容を表している可能性が高い。
- 43) 元文年間（1736～40）の「町明細」（宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近世史料編Ⅰ』、宇都宮市、1980、207～238頁）によると、宇都宮町人町は地子免許が為された町と年貢地の二種類があった。「地子免許之町々」は35町であった。一方、年貢地は南新町・本郷町・新田町・下河原町の4町であり、これらは宇都宮城下町の縁辺部に存在する点で共通している。「地子免許之町々」に限らず年貢地の町々も加えた、以上の39ヶ町の参加で付祭りは構成されていた。町人町のなか、唯一、寺社分であった釈迦堂町のみ付祭りには不参加であった。
- 44) 菊水祭は、近世における9月の宇都宮明神祭礼に相当する。
- 45) 上町と下町における神輿渡御の順番の前後は1年毎に入れ替わる。
- 46) 文化14年（1817）9月「祭礼町々評判記」、観専寺文書。
- 47) 明治以降には、この4町に釈迦堂町（のちの相生町）を加え、宇都宮全町の代表として宇都宮明神の神事に列席する役割を果たす「神祇五町」が成立したが、この4町への神事的出し物の集中、つまり近代に続く「神祇

町」の成立は近世後期以降と想定される。

- 48) 前掲34)。
- 49) 明治期以降に行われた「ブツケ」と呼ばれる各町での囃子の競合も13ヶ所の場所にて行われており(宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近・現代編Ⅱ』, 宇都宮市, 1981, 720~721頁), これと近世における芸場が合致する可能性がある。
- 50) 江戸の天下祭りの一つである山王社の祭礼についての文政5年(1822)の「山王御祭礼番付」(四日市市立博物館編『祭礼・山車・風流-近世都市祭礼の文化史-』, 四日市市立博物館, 1995, 40頁)には, 山車以外にも当時の江戸で出されていた「芸屋台」の類も多数描かれており, 宇都宮の町人等はこのような江戸の祭礼文化を取り込んでいった可能性が高い。
- 51) 前掲46)。
- 52) 安政6年(1859)「御祭礼附祭踊仕様諸入用帳」, 伝馬町自治会文書。
- 53) 手塚屋・まつ屋・い衾屋とも旅籠屋を営む有力町人であった。卯7月「飯盛女当時有人数取調書上帳」, 栃木県史編さん委員会編『栃木県史 史料編 近世2』, 栃木県, 1976, 707~708頁。嘉永元年(1848)「商家番付」, 宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市

史 近世史料編Ⅰ』, 宇都宮市, 1980, 387~389頁。

- 54) 芸屋台を行うためには, 芸能者についての情報, そして町の経済力は欠かすことのできない要素であったといえる。天保2年(1831)9月, 大阪から下ってきた芸人, 若木太夫らが, 塙田村本宮寺において毎晩10日間, 浄瑠璃を興行することとなり, その際の止宿となったのが日野町の弥右衛門宅であった(天保2年(1831)「乍恐以書付奉願上候事」, 宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近世史料編Ⅰ』, 宇都宮市, 1980, 313~314頁)。このように, 旅芸人などを泊めながら, 町々には様々な芸能をはじめとする情報が集まっていた可能性がある。とくに旅籠屋の集中していた伝馬町においては, 様々な宿泊者を通して江戸日本橋の芸能者とのつながりを持つに至ったのではないかと考えられる。芸能者の存在等を把握した情報源については今後の課題としたい。
- 55) 文化12年(1815)9月「御祭礼踊屋躰分限割帳」, 伝馬町上野家文書, 宇都宮大学附属図書館蔵。
- 56) 明治14年(1881)「若者日記」, 伝馬町自治会文書。

Transformation of Tsukematsuri Festival and Merchants-Artisans Communities in Utsunomiya in the Edo Period

Yasuyo WATANABE

Tsukematsuri Festival of Utsunomiya, a castle town in the Kanto region, was historically examined to identify the relationship among the merchants-artisans communities in the Edo period. Tsukematsuri began in 1673 as a festival of merchants and artisans to arebrate Utsunomiya-myojin, the tutelary shrine of the Utsunomiya clan. The festival was conducted by 39 of 40 merchants-artisans communities of the town. Those communities were categorized into lower and upper districts. The communities in the lower district, located in the east of the street linking the shrine and the castle, formed along the historic route. The upper district (Uwamachi) in the west of the street linking the shrine and the castle was formed as a part of the castle town plan in the early 17th century.

In the festival, each community displaied its own performances in its own community area. The program was prepared to set specific time of each display. When the festival began, it was four communities categorized the lower district, which performed the display, followed by the upper and the lower town.

Tsukematsuri was conducted every other year. However, sakaki branches and swords used for the festival were dedicated every year by the communities of the lower district. On the other hand, the upper district, originated in the 17th century, did not participate in the dedication.

Until the early 18th century, popular performances included armored warrior processions and doll displays. In the late 18th century, kabuki plays became the most attractive. The most popular one was played by Tenma community in the upper district. By this time some merchants in the upper town gained its economic status. They could afford to contribute to the festival and to bring performers from Edo. In the early 19th century, 17 communities displayed kabuki performances, most of which had wealthy merchants.

As the performances of kabuki became popular, community unit became more important than district unit. The festival in the early Meiji period did not even consider district to set up the program. The examination of Tsukematsuri in the Edo period thus demonstrated the changing identity of the residents and economic status of communities.

Key words: Tsukematsuri Festival, the Edo period, the merchants-artisans communities in Utsunomiya, the lower and upper districts